

JOHAニューズレター

第35号

日本オーラル・ヒストリー学会第16回大会（JOHA16） 報告特集

2018年9月1日（土）、2日（日）の2日間、日本オーラル・ヒストリー学会第16回大会（JOHA16）が、東京家政大学板橋キャンパスにおいて開催されました。樋口恵子氏による特別講演で幕を開けた今大会は、自由報告部会3つ、研究実践交流会、テーマセッション、シンポジウムがそれぞれ開かれ、活発な討議が繰り広げられました。

今回のニューズレターでは、会員みなさまに、このJOHA16のご報告をするとともに、3月末締切の学会誌15号の原稿募集についてお知らせします。また、第17回大会の日程は2019年9月7日（土）と8日（日）、会場は横浜市立大学金沢八景キャンパスです。プログラムの詳細は未定ですが、自由報告部会も予定しています。エントリー募集などについては、改めてメーリングリストや学会HP上でお知らせいたします。

【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会

第16回大会報告・・・02

1. 大会を終えて
2. 特別講演「語り得ぬ性被害」
3. 自由報告部会1（戦争・移民）
4. 自由報告部会2（運動・労働）
5. 研究実践交流会「オーラル・ヒストリー／ライフストーリーの現場性を問い、一步を踏み出すために」
6. 自由報告部会3（文化・メディア）
7. テーマセッション「女性の声を聴く」
8. シンポジウム「食に聴く、食を書く」

II. 総会報告・・・09

2017年度事業報告・決算報告・会計監査報告、

2018年度事業報告・予算案ほか

III. 理事会報告・・・17

1. 第八期第4回理事会（2018年9月1日）
2. 第八期第5回理事会（2018年12月16日）

IV. お知らせ・・・00

1. シンポジウム「ビジュアル・オーラル・ヒストリーの可能性と現在」開催の案内
2. オーラルヒストリー実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ」第2弾のお知らせ
3. 『日本オーラル・ヒストリー研究』第15号原稿募集
4. 会員の動向
5. 会員異動
6. 2018年度会費納入のお願い

.....
*ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第16回大会報告

1. 大会を終えて

JOHA 第16回大会は、2018年9月1日・2日に、東京家政大学板橋キャンパスで開催されました。2日間で113名の参加者を数え、3つの分科会で計15本の自由報告、特別講演会「語り得ぬ性被害」、研究実践交流会「オーラル・ヒストリー/ライフストーリーの現場性を問い、一步を踏み出すために」、大会校企画テーマセッション「女性の声を聴く」、シンポジウム「食に聴く・食を書く」に加え、オーラル・ヒストリー実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ」写真展示報告と、盛りだくさんの企画で大変充実した大会となりました。各会場ではJOHAらしい自由で活発な議論が展開され、懇親会では33名の参加者が情報交換や交流を深めていただきました。今回の大会では初めての「実行委員会」方式を取り入れましたが、上智大学と東京家政大学の院生7名が骨身を惜しまず働いてくれたおかげでスムーズな大会運営ができたと思います。開催校スタッフを代表して、参加者と関係者のみなさまに心よりお礼申しあげ、来年度開催校横浜市立大学にバトンを渡します。

(第16回大会開催校理事・岩崎美智子)

JOHA16 実行委員会：

岩崎美智子、金城悟、松本なるみ（以上、東京家政大学）、松平けあき、伊吹唯（以上、上智大学大学院生）、池川雅美、塚越亜希子、鳥居希安、林祐子、若林美千絵（以上、東京家政大学大学院生）

2. 特別講演「語り得ぬ性被害—戦時暴行による妊娠と中絶をめぐる—」

本大会の特別講演は、東京家政大学女性未来研究所所長の樋口恵子氏をお招きし「語り得ぬ性被害—戦時暴行による妊娠と中絶をめぐる—」というテーマで開催された。樋口氏は今年2月に本学会の蘭信三会長はじめ上野千鶴子氏、平井和子氏の編集で岩波書店から上梓された「戦争と性被害の比較史へ向けて」の執筆者の一人であり、戦時性被害を含めた女性の人権問題、男女共同参画、社会保障、高齢社会問題等、人権が保障される社会の実現に向けて幅広く積極的に提言されている。

樋口氏は講演の冒頭でご自身のオーラルヒストリーとの関わりや慰安婦問題について話され、優生保護法を巡る論争について言及された。優生保護法は、女性の中絶を巡る産む産まないの自由に焦点が当てられ議論が重ねられたものの、一方で遺伝性の疾患と診断された障がい者に対する本人の承諾なしの不妊手術の強制につながる優生思想を含んだ法律であったと論じた。樋口氏は1994年にカイロで開かれた国際人口開発会議(ICPD: International Conference on Population and Development)に政府代表団のメンバーとして参加し、「いつ、何人、どの間隔をおいて子どもを産むか産まないかは両性の合意によるものである」、というリプロダクティブ・ヘルス/ライツ (Reproductive Health/Rights) の保障という概念に基づくカイロ行動計画(カイロ宣言)の採択に関わった。カイロ行動計画は1996年に優生保護法が廃止され、優生思想を排した母体保護法の成立につながる契機となった。

カイロ国際人口開発会議の最中、樋口氏は代表団メンバーの原ひろ子氏から小学校5年生のときに朝鮮半島からの引き揚げ船から二人の子を道連れに海に飛び込む母親の姿を目撃したとの話を聞く。そのことをきっかけに戦時性被害に遭った女性の問題を調べるようになり、東京家政大学未来研究所の所

長として出版した「戦後 70 年、女たちのステージ・・・周縁から中心へ」において「引揚げ女性の性被害」という題で公にした。性被害で妊娠し引揚げ船で帰国した女性に対し、九州帝国大学系の病院と京城帝国大学系の医師で構成された二日市保養所で中絶手術が行われた。戦時性被害に遭った女性に対する保障は行われず、慰霊碑もいまだ建立されていない。

性被害を語るとセカンドレイプという言葉に象徴されるように社会の冷たい視線や態度、制度の圧力にさらに傷ついてしまう。性被害に遭った女性が語るためには「あなたは悪くなかった、あなたは本当の被害者なのである、そしてそのことは与えた側が悪なのである、そしてあなたを私たちがみんなで守るのである」という社会のサポートが必要であると樋口氏は指摘した。

さらに、戦時暴行による妊娠・中絶の最大の被害者は子どもであることをお話しされ、「語れない、加害の側に身を置くのもこれまた幼い子どもを託されて逃避行を行ったのは女性たちでございます。この加害の記憶の中に押し込まれた女たち、そして消えていった無数の子どもたちを思いますと、やっぱり戦争というものは弱いところにしわ寄せがくる。その女たち、子どもたちの死を背負って、残る人生、なんとか平和な世界をとご一緒に歩んでいきたいと思います」というメッセージを聴衆に語られ、講演が終了となった。

(金城悟)

3. 自由報告部会 1 (戦争・移民)

自由報告部会 1 には、戦争や人の移動をテーマとしたオーラル・ヒストリー研究の精華といえる報告が集まった。

第 1 報告の謝花直美 (沖縄タイムス)「移動と引揚げがつくった「金武湾区」—米軍占領下、沖縄の生存と労働」は、これまでほとんど手がつけられていなかった沖縄戦後史の一側面をオーラル・ヒストリーの手法で浮かび上がらせようとするものである。沖縄戦の後、沖縄島中部に形成され、那覇市に戻れなかった人びとが集住した地域である「金武湾区」の歴史を明らかにし、当事者の記録活動を通して、その記憶を共有・社会化しようとする試みと米軍占領の影響が考察された。

第 2 報告の佐藤純子 (東京経済大学大学院)「戦時体制下台湾における集団疎開—台北師範学校女子部の集団疎開体験者の聞き書き調査を事例として」は、アジア太平洋戦争末期に日本統治下の台湾の中で行われた集団疎開の体験者 (主に台北師範学校女子部の元生徒 3 名) に対する聞き書き調査をもとに、回想録などの文献と照合しながら、その固有の事例の検証を試みたものである。事例研究として興味深かったが、台湾内の疎開の全体において、本事例がどのように位置づけられるのかが気になった。

第 3 報告の竹原信也 (奈良工業高等学校) は、「中国残留日本人女性のオーラル・ヒストリー—移動・家族・八路軍従軍看護婦を中心に—」というタイトルで、満州時代に挺身看護隊として学徒動員された後、戦後は八路軍に看護婦として留用された一人の女性のオーラル・ヒストリーについて報告した。中国「残留」日本人として表現した理由や日赤看護婦との立場上の違いによる語りの差異等に関心が向けられ、フロアとのやりとりがあった。

第 4 報告の森川洋子 (明治大学大学院) は、「ドミニカ日本移民のライフストーリー—記憶の語り—」において、戦後の移民政策の問題から「棄民」とみなされる傾向の強いドミニカ日本移民のライフストーリーに、それとは異なる解釈を与えようと試みる報告を行った。今回は、1960 年代に日本政府により集団引揚げが閣議決定された後もドミニカ共和国に残留した家族の第一世代のライフストーリーのみが紹介

され、第二・第三世代の語りも含めて考察されることが期待された。

第5報告の藤原哲也（福井大学）「福井県の戦傷病者の家族のオーラル・ヒストリー」は、戦傷病者とその妻への聞き取り調査から、妻の視点から捉えた戦傷病者および傷痍軍人会に関する報告であった。報告後は、結婚の時期（戦前、戦中、戦後）・形態（自由恋愛、見合い）や、傷痍軍人会・妻の会など団体の一員としての語りと個人としての語りの差異などについて意見交換が行われた。

（北村毅・八木良広）

4. 自由報告部会2（運動・労働）

自由報告部会2では、様々な社会運動や労働の実践、歴史を語る営みをテーマに5件の報告が行われた。

第1報告の吉村さやか（日本大学大学院）「脱毛当事者コミュニティの運動史—あるカリスマ的女性を中心に—」は、日本国内での脱毛当事者コミュニティの形成を牽引し、現在もコミュニティの中で圧倒的な影響力をもつ女性（阿部更織氏）のライフヒストリーが検討された。考察では、当事者自身があるのままの自分の生活を楽しむという観点からの情報発信を行った阿部氏の実践が報告された。

第2報告の松田ヒロ子（神戸学院大学）「元自衛隊員のオーラルヒストリー：調査の意義と難しさ」は、問題提起的で探索的な報告が行われた。報告では、学術的、社会的にきわめて重要な意義をもつ存在でありながらその成立期を支えた元自衛隊員のオーラル・ヒストリーがほとんど聞き取られていないことが指摘され、高齢化する当事者への調査の重要性が示された。

第3報告の宗野ふもと（筑波大学）「ソ連期ウズベキスタンにおける手工芸の社会主義的生産体制と女性の労働経験：元工場労働者への聞き取り調査から」では、刺繍縫いの女性労働者により作られたフジウム生産組合にかかわる女性たちの語りから、旧ソ連期の女性の労働経験のあり方が検討された。母親英雄制度などの国家政策は女性たちが家にいながらにして勤労者となる状況を可能とし、現地社会で求められる女性役割を満たしながら家事労働と家外労働の二重状況を生み出していることが報告された。

第4報告の山口裕子（北九州市立大学）「生きている過去：草創期インドネシア地方社会の集団的暴力の語りと現在」では、1965年の「ブトン事件」をテーマに、こんにち当事者によって改めて過去が語り表現されること意義やその語られ方について検討された。非定型的な語り方や語られなかったことにも注目しながら、一元的なストーリーに抗する当事者の語りの特徴が報告された。

第5報告の吉田静（立教大学大学院）「三陸の突棒漁における困難と漁師の希望—太平洋戦争中～1960年代に着目して—」では、漁師が経験する困難に注目した語りの考察がなされた。報告では、時代の変化に翻弄されながら「猟師」として生き続けることを語る高齢猟師（男性）たちの語りマイナー・サブシステム論の枠組みのもと考察された。

テーマが多岐にわたり全体を総括する議論には至らなかったものの、各報告に対して今後の分析深化につながる複数のコメントが出され、活発な議論が交わされた。

（石川良子・湯川やよい）

5. 研究実践交流会「オーラル・ヒストリー／ライフストーリーの現場性を問い、一步を踏み出すために―「聞くこと」と「書くこと」を結ぶもの／隔てるもの」

オーラル・ヒストリーの実践において「聞くこと」と「書くこと」の関係性を改めて問い直し、公に議論を共有すること―刺激的な問題設定を掲げたこの交流会では、まず大門正克氏から、とりわけ「聞く」ことの身体性を強調する議論の提起がなされ、それに続いて倉石一郎氏から、「書く」ことをめぐる応答的報告がなされた。そののち、小グループに分かれた会場の参加者によるワークショップ形式で議論が行われた。

学会員でもオーラル・ヒストリアンでもない筆者がこの交流会に参加したのは、大門・倉石両氏と知己を得、お二人の研究に啓発されている一歴史家として、実践交流会のファシリテーターの役目を果たしてほしいという要請を頂いたからである。果たして当日の活発な議論を縫い合わせ深めることにささやかでも貢献できたのか、参加者のご批判を乞いたい。

ところで振り返ってみるならば、「この実践交流会は、聞くことと書くことの「現場性」にこだわり、秘技化されがちなこれらのあり方を公の討議に付し、孤立しがちなオーラル・ヒストリアン間に共同性を回復させることを企図したい」という企画者の切実さを、交流会に参加する以前の筆者はあまり理解していなかったように思う。確かにオーラル・ヒストリーは極めて学際的な研究領域でテーマも多岐にわたるとはいえ、門外漢の筆者からは、オーラル・ヒストリアンはかなりはっきりとした共同性―個人の意味世界への関心、社会構築主義、マイノリティ社会運動への関与など―をすでに持っている研究者集団であるように見えたからである。果たして「回復させる」ことを企図しなければならないほどオーラル・ヒストリアンの共同性は失われているのか、という疑念がなかったわけではない。

しかし当日の議論に参加して感じたのは、個々のオーラル・ヒストリアンが、安易な一般化や脱文脈化を許さない種類の葛藤や困難に直面しているということであった。「聞くこと」の困難、「書くこと」の困難、また「聞くこと」が「書くこと」を、あるいは「書くこと」が「聞くこと」をある種の仕方で制約したり緊張をもたらしたりするという局面は、まさに個々の「現場性」と切り離しがたく結びついている。こうした困難や緊張、葛藤を理解し乗り越えて研究として昇華させるためにこそ、聞き、書くという営みは、まずは「個々のオーラル・ヒストリアンの「流儀」やスタイルの問題として個人化」されざるを得ないのであろう。あらゆる状況や場面に適用可能な枠組みや概念を外側から当てはめて語り手の証言を説明することに留まるならば、オーラル・ヒストリー最大の利点をあらかじめ失ってしまうのだろうから。

大門・倉石両氏の報告と参加者による議論はいずれも、一方で個別的な現場性を手放さずに、他方でそうした困難を他者に伝達可能な仕方で言語化しようとする試みであるように思われた。おそらく筆者を除くあらゆる参加者が、自分のフィールドや実際に聞き取りを行ったインタビューイの顔を常に想起しながら議論をしていたのだろう。この意味での「現場性」は、ほとんど「倫理」と言い換えてしまっても良いような性質のものであると感じる。顔の見えない文字史料を扱う歴史家として、果たして自分は研究者としての倫理をもって仕事ができているのかということをも改めて自省させられたという意味で、このワークショップへの参加は貴重な経験となった。報告者のお二方、また司会の平井和子氏を始め交流会を見事に企画・運営されたスタッフの皆様、そして当日参加して下さったすべての皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

(岩下誠)

6. 自由報告部会3（文化・メディア）

本分科会では文化とメディアに関連する4つの報告が行われた。

第1報告『基地内クラブとAサインクラブの実態—本土復帰前後を中心に—』（澤田聖也）では、在沖米軍人・軍属の娯楽施設であった、民間主導のAサインクラブと、米軍主導の基地内クラブの実態を沖縄のロックミュージシャンに対する聞き取り調査などから描き出した。結果として、復帰後のクラブはアメリカ的空間から、本土的・沖縄的空間へと移行したことなどが明らかにされた。

第2報告『ポール・ダンスのオーラル・ヒストリー—セクシー・ダンスからスポーツへ』（ケイトリン・コーカー）では、関西におけるポール・ダンスのオーラル・ヒストリーを紹介し、2005年から現在までの期間をポール・ダンス歴の過渡期として明らかにした。本報告では、元々は「セクシー・ダンス」というイメージがあったポール・ダンスがいかにスポーツになったのかという点について考察がなされた。

第3報告『自然災害と都市文化—岩手県釜石花街に関する聞き取りを中心に—』（中原逸郎）では東日本大震災をきっかけとした釜石花街と八王子花街の交流および、そこから派生する芸の継承について、聞き取り調査から明らかにした。結果、災害時に罹災した芸能団体から他団体への芸の継承が見られる事例などが提示された。

第4報告『社会派TVドキュメンタリーの成立過程の研究、沖縄返還密約をめぐる「メディアの敗北」の研究』（西村秀樹）では、当該番組が制作される過程、すなわち「取材対象者への接触」「番組化の承諾」「番組の狙いは達成できたのか」などの点について、番組ディレクターの土江真樹木子氏に対する聞き取り調査から明らかにした。

第5報告『放送史研究における「オーラル・ヒストリー」の考え方と実践的方法論試案』（吉田功、広谷鏡子）では、資料が残りにくい領域である放送史を研究する上で、オーラル・ヒストリーがどのような点において有効であるのか報告がなされた。また、事前準備や聞き取りの手法、保存・整理・活用についての提言もなされた。

以上の報告に対してフロアからも多くの質問・意見が提示され、活発な議論が行われた。

（池上賢）

7. 大会校企画テーマセッション「女性の声を聴く」

本セッションは、各方面で女性の声を聴く活動を続けておられる3人の研究者・実践者を迎えて、女性が語る/語らないことの意味を再考すべく企画された。

企画趣旨の説明に続いて、第1報告の柳原恵氏は、石川純子の聞き書きの実践とライフストーリーの考察をとおして、「東北の農婦（おなご）」の声を可聴化する問題を検討した。石川自身の妊娠・出産の経験（「孕み」）を通じた価値転換に端を発する聞き書きのプロセスを通じて〈聴く—語る〉場が成立し、重層的な〈沈黙〉が破られ農婦が〈語る主体〉となり得たこと、聞き書きにはおなごの「母語」に耳を傾けようとする方法論としての可能性があることを論じた。第2報告の薄井篤子氏は、東日本大震災と原発事故によって埼玉県へ避難してきた人たちとの出会いと支援活動をもとに、「避難者」と「支援者」という非対称的な関係性の困難や、「支援としての傾聴」から「聞く体験」への転換、言葉にできない「沈黙」や怒りや苦悩を感じとった経験を挙げ、「避難者」が過去をとらえ直し自身の体験を意識化するためには聞き手の存在が不可欠であることを提示した。第3報告の山村淑子氏は、昭和—桁世代の女性たちとの36年にわたる交流から「あたりまえに生きてきた」女性たちの声を聴く実践を語

り、ある女性の発言に続いて女性たちの「沈黙」が一気に破られ熱い議論が交わされたこと、それまで戦争の被害者だと思っていた自らが加害者であるにとらえ直し、女性たちを取り囲んでいた戦時下の圧力である「良妻賢母教育」に気づくという教育体験の検証について論究した。

これら3報告に対して、山田富秋氏は、オーラル・ヒストリーにとってもっとも重要な「語る－聞く」がどう成立するのかの考察が共通に語られたと指摘した。加えて、柳原氏の報告によって「身体性」に根ざした言葉に戻ることの重要性を確認し、薄井氏からは「生」がむき出しの状態となった避難者に支援者がどう向き合っていくかの意識化という課題が提起され、山村氏の報告から女性たちに対する新たな圧力としての「新・良妻賢母教育」を見出すという視点の転換について学んだと、それぞれの報告に関してコメントがなされた。

フロアとの質疑応答では、3つの報告はいずれも「女性が女性の声を聴く」という共通性をもつがそれに伴う困難と聞き手自身の認識の変化はあったのかという質問や、聞き手が自分（私）を消すことの難しさが問われ、意見が交わされた。

このように、3報告がいずれも熱のこもった重量感のある報告であったため、所定の2時間では質疑応答に十分な時間をとれなかったことに企画者・司会者としては反省が残ったが、報告内容をテーマとしてさらに議論を深める機会を得たいと思うような刺激的なセッションであった。

(岩崎美智子)

8. シンポジウム「食に聴く、食を書く―食の媒介者たちをめぐる歴史と社会」

本シンポジウムは、「食」のあり方を手がかりにある時代や社会の一面を浮き彫りにすることをオーラル・ヒストリー研究の重要なテーマとして明確に位置づける意義と、その際に乗り越えなければならない諸課題について共有し、討議することを趣旨として開かれた。パネリストの三方は、それぞれ人類学・社会学・歴史学の領域において、ライフストーリー、オーラル・ヒストリー、生活史などをキーワードに、いずれも食文化や食生活にまつわる研究を先駆的に行ってきた方々である。コメンテータの藤原辰史氏（京都大学）は、主たる手法は文献史学であるが、『ナチスのキッチン』など画期的なフード・ヒストリー研究を切り拓いている気鋭の研究者である。このような豪華な顔ぶれから生まれる議論をうまく噛み合わせ、交通整理できるだろうか―期待とともに緊張もおぼえながら、本番を迎えた。

赤嶺淳氏（一橋大学）による第一報告は「高度経済成長期の食生活の変化を聞き書く：食生活誌学のこころみ」と題されたものだった。同氏の関心は高度成長期前後の捕鯨や鯨食の歴史である。戦後に鯨が食卓に届くに際して大きく寄与したのがコールド・チェーンの確立である。各家庭に冷蔵庫が普及し、高速道路網が整備され、小売りの主流がスーパーに移行するという社会変動がそこに関わっていたのである。赤嶺氏は鯨の研究から浮かび上がった食のオーラル・ヒストリーの課題として、大きな歴史と小さな歴史をいかに交差するかを挙げた。語りには全体的傾向が反映されるだけでなく、各家庭の個別の事情や好みもまた関与するからである。また赤嶺氏は、前の勤務校（名市大）で、教育の一環として学生に聞き書きに取り組ませる実践を行っていた。鯨と言えば「竜田揚げ」が連想されるが、愛知県周辺では鯨があまり食べられておらず、食べても焼くか煮るかであったという。このようにステレオタイプな物語を超えることも、オーラル・ヒストリー研究の重要な意義である点が確認された。

続く桜井厚氏（日本ライフストーリー研究所）からは「現代史における食肉文化の光と影：食肉生産にかかわる人びとのオーラルヒストリーから」と題した報告が行われた。桜井氏のテーマは食肉（主に牛）

であり、食肉生産の要となる屠場にかかわる人びとや屠場のある地区の人びとから、数多くの聞き取りを行ってきた。まず、流通にのらない食材である「なかのもん」が紹介された後、奇妙な肉食行為として、高度成長期ごろまで肉を「隠れて食べる」ことがあったという語りが言及された。さらに食肉の流通経路とそれに関わる人びと、食肉生産地がはぐくんできたネットワークについて、語りのエピソードも交えつつ詳しく紹介された。その上で話題は、重要な論点である食と屠場と被差別部落の重層的関係に及んだ。ここで桜井氏が注意を促したのは、必ずしも屠場＝部落、あるいは屠場ではたらく人びと＝部落の人びとという図式が成り立たないことであった。最後に、忌避的ストーリーとして「環境問題のストーリー」と「教育問題のストーリー」が紹介されたほか、対抗的ストーリーとして塀を低くしたり蓄霊碑を撤去する試みが紹介された。

最後に野本京子氏（東京外国語大学（名））から、「食に聴く・食を書く：食の媒介者たちをめぐる歴史と社会」と題する報告があった。野本氏が主に関心を持っているのは明治、大正から昭和戦前期にかけての食の変容であり、直接聞き取りをすることは困難だが、当該時代に行われた聞き取りを含む調査記録、写真、個人の日記、家計簿、学童疎開日誌などを活用して豊かな研究可能性が開かれることが論じられた。特に氏が強調したのが「常食物」「主食物」の調査であった。日本では米が主食（常食）であることが一般には自明とされてきたが、歴史的にはその構成が大きく変容しており、時代の節目ごとの社会変容や中央政府による政策的誘導がそこに大きく関わっていることが示された。また都市と農村という軸を設定すれば、食生活の変遷も大きく異なる点にも注意が促された。

以上3報告に続いて、藤原氏からのコメントが行われた。その論点は大きく四点であった。(1)食の研究の悩みとして、食が人間のプライベートに深く関わる事象であり、その点で食の歴史は性の歴史に似た側面があり、似た困難を抱えているとの指摘があった。また味覚や嗅覚に関わる経験をどのように言語によって記述するのかという根本的問題が挙げられた。自身の研究もレシピを史料に用いたが、なお模索中であるとのことだった。(2)価値の問題として、桜井、野本報告にもあったように「貧しさ／豊かさ」という価値を単純に論じられない点が指摘された。食の歴史は近代化のストーリーには簡単になじまず、それを相対化する可能性も存在している点が重要である。(3)食の保守性として、桜井報告にもあったように食が人間に対するスティグマの源となり、差別や排除の問題にもつながっている点が指摘された。(4)食と死の問題として、動物を殺して食するという意味での死、さらに飢餓の歴史、飢饉の歴史ともつながっている点が指摘された。食の経験は、裏側に食べることができない経験が貼りついているのである。以上の四点の指摘に加え、各パネラーに対する藤原氏からの質問とそれに対する応答が行われた。

最後に、フロア全体に開いた全体討論が行われたが、司会の不手際ですでに4時25分になっており、会場校のご好意で5時まで延長することで何とか全体討論の時間を確保することができた。活発なやり取りが交わされたが、やはり多くの会員の関心は、食の経験をどのように言語化し、記述することが可能かという方法に重点が置かれていた。いずれにしても、今後の食のオーラル・ヒストリーの発展可能性に期待がふくらむ、そんなシンポジウムとすることができた。企画者として、大きな手ごたえを感じることができた。最後に、本シンポジウムのために尽力いただいた、登壇者はじめ多くの関係者の皆さまにあつく御礼申し上げます。

(倉石一郎)

Ⅱ. 総会報告

2018年度総会（第15回総会）

日時：2018年9月2日（日）12：05～13：05

場所：東京家政大学板橋キャンパス 16号館 161B講義室

会長挨拶、議長選出（塚田守会員）の後、以下の議案が諮られた。

第1号議案 2017年度事業報告

2017年度（2017.9.1～2018.8.31）事業報告について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員数の現状

前回学会以降、2018年3月末までの新規入会者は10名（一般7名、学生他3名）。4月以降の入会は、10名（一般6名、学生他4名）あった。3年間の学会費未納による自動退会者11名、自己申告退会は15名あった。8月31日現在の会員は261名（前回267名）である。これは昨年同時期と比べ6名の減少である。

2. 第15回大会（JOHA15）の実施と第16回大会（JOHA16）の開催

第15回大会は、2017年9月2～3日の二日間にわたって近畿大学（大阪府東大阪市：開催校近畿大学）で開催した。自由報告は4つの分科会に分かれ14本が報告され、一般報告他、第4部会ではテーマセッション「再び〈戦争の子ども〉を考える」が開催された。また大会初日には、研究実践交流会「世代をつなぐ聞き取り——オーラル・ヒストリーの可能性」を、大会二日目には、シンポジウム「戦争経験の継承とオーラルヒストリー——体験の非共有性はいかに乗り越えられるか」を開催した。開催校によると2日間でのべ93名が参加、地方開催でありながら盛況でなった。第16回大会は、2018年9月1～2日の二日間、東京家政大学で開催する。

3. シンポジウムの開催

2018年3月17日に上智大学（東京）において、シンポジウム「オーラルヒストリーのアーカイブ化を目指して」をおこなった（共催：日本移民学会、総合女性史学会）。蘭信三氏をモデレータ・司会とし、報告は安岡健一氏、宮崎黎子氏、小林多寿子氏、森本豊富氏、コメントに福島幸宏氏でおこなわれ活発な議論が展開された。

4. オーラルヒストリー実践ワークショップの開催

2018年6月10日、オーラルヒストリー実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ」を実施した。橋本みゆき氏をコーディネーターとして、伊地知紀子氏をむかえ「著者ととも『消されたマッコリ。』の舞台を歩く」をおこなった。定員の20名に研究活動委員5名をくわえ、計25名が参加した。

5. 学会誌13号の発行と14号の編集・発行

2017年9月に学会誌第13号を発行し、同月中にインターブックス社から配送した。14号の編集作業は順調に進み、例年通りの発行を予定している。

6. ニュースレターの発行

ニュースレターは第15回大会後、第16回大会の間に、33号（2018年1月22日）と34号（2018年

7月17日)を発行した。広報委員2名が編集分担した。会員メーリングリストでの配信を行った。

7. ウェブサイトの充実

ウェブサイト (<http://joha.jp/>) を学会事務局と広報委員会が管理運営している。

8. 会員相互の交流の促進

会員メーリングリストを通じた会員相互の情報発信が適宜なされている。

9. 学協会誌の電子化事業

学協会誌の電子図書館事業が2016年度に終了となることに対して、本学会では、2017年よりJ-STAGEへ参加をすることとした。すでに手続きは終了し、今後徐々に掲載される予定である。なおインターブック社に業務を委託している。

以上

第2号議案 2017年度決算報告

2017年度(2017.4.1~2018.3.31)決算報告資料に基づき報告され、了承された(資料添付)。

第3号議案 2017年度会計監査報告

好井裕明監事と川又俊則監事より「会計帳簿、預貯金通帳、関係書類一切につき監査しましたところ、正確で適切であることを認めましたので、ここに報告いたします」と報告があり、了承された。

第4号議案 2018年度事業案

2018年度(2018.9.1~2019.8.31)事業案について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員の拡大と維持

年次大会やシンポジウムなどの実施を確実にを行い、これらの情報を広報することで、本学会の周知に努め、会員数の拡大を目指す。会員の維持と会費収入確保のため、大会後、年内を目途に郵送による入金状況確認を行い、会費納入の督促を行うと同時に未納退会者を防ぐようにする。

2. 第16回(JOHA16)大会の実施と第17回大会(JOHA17)の準備

第16回大会を2018年9月1~2日の二日間にわたって東京家政大学(東京都板橋区)において開催する。自由報告は3つ*の分科会に分かれ、15本の個人報告を予定している。本年度は、特別講演会「語り得ぬ性被害——戦時暴行による妊娠と中絶をめぐって」(講師:樋口恵子、共催:東京家政大学女性未来研究所)、研究交流実践会として「オーラル・ヒストリー/ライフストーリーの現場性を問い、一步を踏み出すために——「聞くこと」と「書くこと」を結ぶもの/隔てるもの」(以上、9月1日開催)、と大会校企画テーマセッション「女性の声を聴く」、シンポジウムとして「食に聴く・食を書く——食の媒介者たちをめぐる歴史と社会」(以上、9月2日開催)を予定。広報活動として学会HPに掲載し、学会理事を中心に広報に努めている。来年度の第17回大会については2019年秋に二日間、横浜市立大学での開催を予定。

*総会後のご指摘をうけ、「4つ」→「3つ」に修正いたしました。ご了承ください。

3. 学会誌第15号の発行

学会誌第15号は、第8期理事会の編集委員会によって、JOHA16のシンポジウムと自由投稿をもとにして編集する方針である。また第8期より非理事の編集委員を4名選定し編集委員会をたちあげ、学

会誌の査読体制などの充実を図っている。本年度も電子メール添付での応募を可能にする方針である。

4. 研究会・ワークショップの開催

シンポジウムは2019年3月、ワークショップは2019年6月ごろ実施予定。内容は第8期の研究活動委員によって決定予定。

5. ニュースレターの発行

JOHA16後に大会報告を中心にしたニュースレター第35号を、JOHA17前に大会プログラムを中心にした第36号の発行を予定している。

6. ウェブ情報の充実と改善

学会ホームページをさらに見やすく整備するとともに、適宜更新していく。

7. 会員相互の交流促進

学会HPや会員メーリングリストの活用、ニュースレター配信を通じて、会員相互の交流を促進する。また、会員の出版、活動情報についても学会誌での書評等を通じて積極的に共有する。

8. 海外のオーラル・ヒストリー団体との交流

理事および関心ある会員を中心に、海外のオーラル・ヒストリー団体との交流を促進し、会員に情報提供を行う。

9. 学協会誌の電子化事業

J-STAGEへの移行作業を速やかに完了させる。

第5号議案 2018年度予算案

2018年度（2018.4.1～2019.3.31）の予算案資料に基づき提案され、了承された（資料添付）。

（第8期事務局長 人見佐知子）

第2号議案

2017年度決算報告(2017/4/1~2018/3/31)

収入

費目	予算	決算	差額	摘要
会費収入	1,000,000	913,000	△ 87,000	
賛助会費収入	0	0	0	実績なし
大会収入	100,000	240,000	140,000	参加費(¥92,000)、懇親会費(¥148,000)
ワークショップ収入	0	0	0	開催せず
寄付金収入	0	0	0	実績なし
学会誌収入	20,000	67,507	47,507	丸善雄松堂、国立女性会館ほか
学会誌広告収入	100,000	70,000	△ 30,000	昨年比2社減
著作権料収入	0	131,956	131,956	H28年度分入金電子図書館(NII-ESL)
雑収入	3	4	1	預金利息
今年度収入合計	1,220,003	1,422,467	202,464	
前年度繰越金	1,930,845	1,930,845		
収入合計	3,150,848	3,353,312		

支出

費目	予算	決算	差額	摘要
大会運営費	150,000	274,215	124,215	学生アルバイト、シンポジスト謝金・交通費、弁当代、懇親会費等
会議費	10,000	0	△ 10,000	
研究活動費	50,000	109,089	59,089	3月17日シンポジウム(謝金・交通費・昼食等)
旅費交通費	150,000	140,580	△ 9,420	J-Stage打合せ・理事会旅費
通信費	100,000	124,202	24,202	事務局移動経費、郵送費等。インターブックス13号発送費含まず。
広告宣伝費	7,000	6,492	△ 508	johaドメイン維持費、Webサーバー使用料
事務消耗品費	15,000	691	△ 14,309	文具等
学会誌費	650,000	559,440	△ 90,560	インターブックス13号印刷費
事務局補助費	60,000	15,814	△ 44,186	J-Stage打合せ宿泊・事務局アルバイト代等
予備費(雑費)	1,958,848	0	△ 1,958,848	
支出合計	3,150,848	1,230,523	△ 1,920,325	

上記の通り報告いたします。

平成30年8月30日 日本オーラルヒストリー学会会計 上田貴子

第5号議案

2018年度予算案(2018/4/1~2019/3/31)

収入

費目	本年度予算	前年度予算	差額	摘要
会費収入	1,000,000	1,000,000	0	会員微増(前年度実績 ¥913,000)
賛助会費収入	0	0	0	前年実績なし
大会収入	250,000	100,000	△ 150,000	(前年度実績 懇親会費込 ¥240,000)東京開催、懇親会費込
ワークショップ収入	10,000	0	△ 10,000	¥500×20人
寄付金収入	0	0	0	前年実績なし
学会誌収入	20,000	20,000	0	バックナンバー等(前年実績¥67,507)
学会誌広告収入	100,000	100,000	0	(前年実績¥70,000)
著作権料収入	0	0	0	電子図書館(NII-ESL)
雑収入	3	3	0	預金利息
今年度収入合計	1,380,003	1,220,003	△ 160,000	
前年度繰越金	2,122,789	1,930,845		(参考 2016年度繰越金 ¥1,495,544)
収入合計	3,502,792	3,150,848		

支出

費目	本年度予算	前年度予算	差額	摘要
大会運営費	300,000	150,000	△ 150,000	実際の支出に近い数字とし、東京開催のため多めとした
会議費	10,000	10,000	0	理事会・各委員会の会議室使用料等
旅費交通費	150,000	150,000	0	繰越金増による理事への旅費補助の増加
通信費	120,000	100,000	△ 20,000	理事選挙がないが、前年度13号発送手数料を今年度支払うため
広告宣伝費	7,000	7,000	0	johadメイン維持費、Webサーバー使用料
事務消耗品費	15,000	15,000	0	
学会誌費	650,000	650,000	0	学会誌制作費をページ数増にともない増加
研究活動費	100,000	50,000	△ 50,000	シンポジウム・ワークショップ開催を考慮
事務局補助費	60,000	60,000	0	事務局アルバイト代、会計アルバイト代
予備費(雑費)	2,090,792	1,958,848	△ 131,944	
支出合計	3,502,792	3,150,848	△ 351,944	

上記の通り提案いたします。

平成30年8月30日 日本オーラルヒストリー学会会計 上田貴子

総会において、通信費に理事選挙の経費を計上した修正案を提案しましたが、実際には理事選挙は2019年6月に実施されますので、2019年3月末までの2018年度会計では出納いたしません。手元の過去の会計資料と突き合わせてこの点確認いたしましたので、最初に提出し一回目に承認をうけました予算案をもとに今年度は予算の執行を行いたいと存じます。

Ⅲ. 理事会報告

第八期 第4回 JOHA 理事会 議事録

日時：2018年9月1日（土）10:30～11:30

場所：東京家政大学 板橋キャンパス 16号館 2階 162A 講義室

出席：蘭信三、人見佐知子、上田貴子、田中雅一、倉石一郎、佐藤量、橋本みゆき、根本雅也、佐々木てる、石川良子、北村毅、山田富秋、大門正克、中村英代、矢吹康夫、岩崎美智子、滝田祥子*（順不同、敬称略） *オブザーバー参加

欠席：平井和子

議事録記載者：根本雅也

1. 前回議事録・議事録記載者確認

前回議事録については異議なし。

2. 会長より

蘭会長より、学会誌と大会の開催が学会の両輪であることが話され、今大会については開催校理事の岩崎理事を中心に素晴らしい準備がされたことへのお礼が述べられた。

3. 編集委員会報告

佐々木編集委員長より、JOHA14号、15号、J-STAGE へのアップについて報告があった。第14号の最終チェックが行われ、9月21日（金）刊行予定であること、今号は12社からの広告を得られ、昨年より多くなったことが述べられた。また、査読に関連した問題点として、テーマ的には良いのだが、論文の目的と内容にズレがある投稿論文が散見されたため、今後は「研究ノート」「実践報告」といった項目を設けることで、「論文」のカテゴリーに当てはまらないものを含めていくことも検討していることが共有された。次回の15号については、これまでしてこなかった英文（アブストラクト・タイトル）のチェックをインターブックス社に依頼するかどうかを検討していること、特集については今回のシンポジウムと春に行ったオーラル・ヒストリーのアーカイブ化を取り上げる予定となっていることが述べられた。J-STAGE については、インターブックス社より年末までには出せるようにしたいとの報告を受けたことが説明された。

蘭会長より、テーマ・目的と内容がずれているというのは大学院生にも多く見受けられること、そのために「投稿論文」ではなく「資料」という項目を設けている学会もあることが指摘された。橋本理事からは、以前の本学会誌には、資料紹介といった形で聞きとりの記録が掲載されていたと指摘がなされた。

4. 研究活動委員会報告

田中研究活動委員長より、今期の活動について報告がなされた。3月には蘭会長が中心となったオーラル・ヒストリーのアーカイブ化についてシンポジウムがあり、6月には橋本理事が中心となって企画した

「現地と作品を結ぶ」ワークショップが開催された。また、今大会では倉石理事が中心となったシンポジウムが開催される。蘭会長からは、ワークショップの試みはタイム・マネジメントに課題はあるものの、とても良い企画であり、今後 JOHA の目玉となる活動ではないかと述べられた。

また、田中研究活動委員長より今後の活動計画についても報告があった。現地と作品を結ぶワークショップについては現在複数の候補が出ており、震災に関連して千葉県旭市や東北地域、またそのほかには原爆が投下された広島、京都の花街、京都か神戸の占領期の街娼のいた地域を案内してもらおうといった案が出ている。来年の大会シンポジウムについては根本理事より「見えないもののオーラル・ヒストリー」というテーマが提案されていることが説明された。春はまだ具体的に考えてはいないが、大会シンポジウムに関連したテーマに結びつけるか、他の理事から何かあればそれを積極的に支援していきたいという旨が話された。

大門理事より、今後のためにも、今期の実践ワークショップの記録を JOHA15 号に掲載するのはどうかという提案がなされた。蘭会長からは、参加者のコメントの紹介や著者である伊地知氏のコメントも含めた報告の形が良いのではないかと示唆された。これに対し、橋本理事からは検討していきたいという旨が述べられた。

蘭会長からはワークショップの複数回の開催も提案され、その際には研究活動委員以外が企画・実践に関与することも示唆された。

5. 広報委員会報告

矢吹広報委員長から、次回のニューズレターの発行は 12 月ごろを予定しており、内容は今大会の報告が中心になることが述べられた。

6. 会計報告

会計の上田理事より、前回の予算・決算案から変更がないこと、また監査の承認を得たことが報告された。

7. 事務局報告

人見事務局長より、新入会員が 4 名、退会者が 5 名との報告があり、今期は全体で会員数が 6 名減少した。

8. その他

蘭会長より、非理事で研究活動委員の平井和子氏から一身上の都合による辞任の申し出があったことが報告された。人見事務局長からは、任期途中で辞任については学会の規定がないことが言及された。

また、蘭会長から新規会員獲得の必要性について述べられた。人見事務局長より、春のシンポジウムの後に数名が新規会員となったことが説明され、そうした機会を見つけて会員の獲得をしていくことが重要ではないかと指摘があった。

来年度大会開催予定校である横浜市立大学の滝田祥子氏より挨拶がなされた。大会校の企画案として、横浜の歴史に関連したフィールドワーク・エクスカージョンが提案された。これについて、田中研究活動委員長からは (1) 大会全体行事とする (前日となる金曜日を含む)、(2) 部会と並行して実施する、(3)

実践交流会の形として行うという複数の可能性がありうることが指摘された。

来年度の大会日程案について、滝田氏より9月7、8日が提案された。

人見事務局長より次回の理事会の日程について提起され、12月15、16日のいずれかとなることが確認された。

第八期 第5回 JOHA 理事会 議事録

日時：2018年12月16日（日）13:00-15:50

場所：上智大学

出席：蘭信三・人見佐知子・上田貴子・佐々木てる・山田富秋・佐藤量・根本雅也・橋本みゆき・矢吹康夫・滝田祥子・石川良子（順不同）

議事録記録者：石川良子

1. 前回議事録・議事録記載者確認

前回議事録について修正・補足はないことが確認された。

2. 会長から

蘭会長より、来年度大会で今期理事会は終了すること、来年は改選の年になるので準備を進める必要があることが述べられた。

3. 編集委員会報告

佐々木編集委員長より、以下3点について報告・確認があった。

(1) 『日本オーラルヒストリー研究』15号について

15号についてはホームページおよびニュースレターで告知することが述べられた。スケジュールと投稿資格は例年通りで、投稿論文が揃い次第、3月末頃から編集作業をスタートすることが説明された。また、14号は実務家からの投稿が多く、その大半が内容は興味深くて論文形式に添わないために掲載に至らなかったため、次号告知では実践報告という枠での投稿を募りたいとの提案があった（字数は1,600字程度）。

(2) 15号の特集について

今年度大会のシンポジウムを特集として掲載すること、原稿〆切は6月末であることが確認された。4月開催予定の編集委員会で担当委員を決定するが、それに先立って佐々木編集委員長より原稿執筆について報告者に依頼・確認することが共有された。また、蘭会長より特集原稿について、既発表論文に基づく発表だった場合のリライトの基準について指摘があった。日本社会学会をはじめ他学会の基準を確認し、メーリングリストで共有することに決まった。また、リライトの基準は投稿規定ではなく内規に含めることが確認された。

(3) 過去の『日本オーラルヒストリー研究』のJ-Stageへのアップ作業

佐々木編集委員長より、2018年中にインターブックスによる作業が完了する旨が報告された。支払いについては佐々木編集委員長がインターブックスとの交渉窓口になることが確認された。この件に関しては、佐々木編集委員長が赤嶺前編集委員長にインターブックスとの契約内容について確認するとともに、インターブックスに適正金額を問い合わせ、その結果を理事会メーリングリストにて共有・検討することになった。また、今回はバックナンバーをまとめてアップしているので一括での支払いになるが、今後は1号ずつ代金を計算して書面を作成してもらえようインターブックスに依頼することが確認された。

4. 研究活動委員会報告／来春および学会での実践交流会やシンポの提案

(1) オーラルヒストリー実践ワークショップ「作品と現地をつなぐ」企画案

橋本みゆき研究活動委員より、オーラルヒストリー実践ワークショップ「作品と現地をつなぐ」の企画案が報告された。昨年6月に開催した同ワークショップが好評だったので3月(京都)と5～6月(千葉)の年2回の開催を企画している旨が報告されたが、蘭会長より例年3月はシンポジウムを開催しており、総会において学会の活動方針としても示しているため、それをとりやめてワークショップを行うことの意味・意義を説明する必要があるのではないかという疑義が示された。また、開催時期を年次大会の間に均等に設定したり、フィールドも関西と関東の1箇所ずつにしたりするなど、検討すべき事項が多いという指摘がなされた。これを踏まえて、3月はシンポジウムとワークショップを連動させるような形で企画を練り直すことになった。加えて、次期理事会への引き継ぎ事項として、今後は会長も研究活動委員会のメーリングリストに加入することが確認された。

(2) 大会シンポジウム「〈見えないもの〉のオーラルヒストリー」企画案

根本雅也委員より、大会シンポジウムの企画案について報告された。内容についてはとくに問題がないので、登壇者の選定を進めていくことが確認された。

(3) 研究実践交流会

来年度年次大会での研究実践交流会について、滝田祥子理事より報告された。ゲストに映画「ヨコハマメリー」を監督した中村高寛氏をお招きすることは決定しており、内容については橋本みゆき研究活動委員と相談しながらさらに検討する旨が報告された。蘭会長より、研究実践交流会は単なる講演会・トークショーではないので、会員がそれぞれの実践にどう取り入れられるのかを意識する必要があるのではないかという指摘があった。また、大会前日に伊勢佐木町周辺でエクスカージョンの実施を予定していること、中村氏への謝礼の金額については検討の余地があることも報告された。

5. 広報委員会報告

矢吹康夫広報委員より、次号のニューズレターについて報告された。

6. 会計報告

上田貴子理事より2018年度大会会計について報告された。大会運営費と非会員への謝礼・旅費を合わ

せて支出は約 28 万円で、例年通りであることが報告された。なお、「準会員」としてカウントされているのは大会開催校企画講演会の講師の関係者であるとの補足説明があった。

7. 事務局報告

(1) 会員異動

新入会員は 4 名、退会者はなかったことが事務局より報告された。

(2) 立教大学への会誌寄贈について

立教大学はメーリングリストのサーバー使用など便宜を図ってもらっているため、最新号については寄贈することに決定した。今後は賛助会員として加入をお願いするか、定期購読として対応するのか（現在は定期購読は行っていない）、継続的に審議を行うことになった。また、定期購読は規約変更に関わる可能性もあるため、他学会の状況について情報収集を進めることになった。

8. その他

(1) 2019 年度大会について

滝田祥子理事より、大会当日の施設利用料は横浜市立大学から 10 万円の補助が出ることが報告された。また、託児サービスの実施について検討された。要望の有無にかかわらず託児サービスを準備すること、経費は学会予算から出すことが確認された。なお、山田富秋理事より松山大学で開催した 2018 年度関西社会学会大会の予算が参考として示された（1 日 21600 円＝保育士 2 名／半日 7500 円＋自己保険 8000 円、利用料は学会規定で 1 時間 1000 円）。

(2) 理事選挙

事務局の人見佐知子理事、会計の上田貴子理事に加えて立会人 1 名で準備を進めることが確認された。なお、立会人は一般会員で、事務局から依頼する。

(3) 会員の動向について

本学会会員の矢吹康夫さんが日本社会学会奨励賞、柳原恵さんが女性史学賞をそれぞれ受賞した。今後はニューズレターに「会員の動向」という欄を設けて、学会賞の受賞や著書の刊行など会員に関する情報を共有していくことが決定した。また、その内容はホームページにも掲載すること、このコーナーには会員からの投稿を受け付けることが確認された。

(4) 国立大学教育研究評価委員会専門委員及び機関別認証評価委員会専門委員の候補者推薦事務局に一任することが承認された。

(5) 次回の理事会

2019 年 6 月 15・16・22・23 日のいずれかで調整を進める（場所は上智大学）

IV. お知らせ

1. シンポジウム「ビジュアル・オーラル・ヒストリーの可能性と現在」開催の案内

近年、映像人類学や映像社会学といったように、写真や映像といったビジュアル資料を用いた研究への関心が高まっている。この流れはオーラル・ヒストリーの実践においても無関係ではない。写真やビデオを用いた聞きとりや記録の作成、そしてそうしたビジュアル資料を活用する研究など、オーラル・ヒストリーの実践の諸段階でビジュアル化が進められている。

本シンポジウムでは、オーラル・ヒストリーとビジュアル表現を組み合わせた研究や活動に関わる方々を招き、写真や映像などをオーラル・ヒストリーの実践に活用する意義や課題について考える。写真や映像は、「聞く」「書く」「残す」というオーラル・ヒストリーの営みに何をもたらし、どのような可能性を与えるのだろうか。ビジュアル表現を用いたオーラル・ヒストリーの方法、ビジュアル・アーカイブの意義、ビジュアル・データの活用などについて学ぶとともに、ビジュアルで表現すること／されたものの意味——たとえば死者への追悼——を探っていくことにしたい。

・日時：2019年3月10日（日） 13:30~17:00

・会場：大阪経法大学東京麻布台セミナーハウス（東京）

<http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia-pacific/access.html>

日比谷線神谷町駅より徒歩五分

・報告：佐藤知久（京都市立芸術大学）、西村明（東京大学）、新井卓（写真家）

・コメント：安岡健一（大阪大学）、木村豊（日本学術振興会）

・参加無料、申込不要

・問い合わせ先：日本オーラル・ヒストリー学会 第8期研究活動委員会 <johakenkatsu8@gmail.com>

*より詳しいプログラムは学会 HP (<http://joha.jp/>) に掲載していきます。

2. オーラルヒストリー実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ」第2弾

昨年度好評だった、オーラルヒストリー実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ」の第2弾として「著者とともに京都上七軒を歩く」を予定しています。

2019年5月26日（日）（予定）に、『日本オーラルヒストリー研究』第14号に論文が掲載された中原逸郎さんを講師に、京都の花街を歩きます。

詳細は会員メーリングリスト、学会 HP で後日お知らせします。

3. 『日本オーラル・ヒストリー研究』 第15号 原稿募集

論文、研究ノート、聞き書き資料、書評、書籍紹介の原稿を募集いたします。投稿希望者は『日本オーラル・ヒストリー研究』第14号の投稿規定・執筆要領を参照の上、以下の編集委員会メールアドレスまで原稿をご送付ください。図版の著作権をはじめ、図版の文字換算など、12号以降は執筆要領の変更が多々ありますので、ご注意ください。

- 提出原稿は、査読審査を経たのち、6月中旬ごろに掲載の可否が決定します。
- 12号より原稿の提出は、メール添付で受け付けることとなりました。以下のアドレスにご送付ください。学会大会で発表されたみなさんをはじめ、会員のみなさまからの投稿をお待ちしています。投稿に関し、質問があれば、お気軽に以下の問い合わせ先にお訊ねください。
- 募集期間：2019年3月20日～31日(厳守は従来通りですが、メールによる事故を防ぐため、募集期間を設けます。ご協力ください)。
- 問合せ・応募原稿送付先：joha_journal(at)ml.rikkyo.ac.jp

なお編集委員会では、学術論文のみならず現場からの報告、「実践報告」に関しても充実させていこうと思っております。字数に関しては16,000字程度をめやすとしています。ふるってご応募ください。

(編集委員長 佐々木てる)

4. 会員の動向

- 会員の矢吹康夫さんの著書『私がアルビノについて調べ考えて書いた本—当事者から始める社会学』(2017年、生活書院)が日本社会学会による「日本社会学会第17回奨励賞(著書の部)」を受賞しました。
- 会員の柳原恵さんの著書『<化外>のフェミニズム—岩手・麗ら舎読書会の<おなご>たち』(2018年、ドメス出版)が奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センターによる「2018年度第13回女性史学賞」を受賞しました。

* 今後も、JOHA会員の著作の出版や受賞などの動向をニューズレターでお知らせしていく予定ですので、事務局まで情報をお寄せください。

5. 会員異動(2018年6月17日～2018年12月16日)

(1) 新入会員(入会順)

中澤英利子 横浜市立大学大学院都市社会文化研究科後期博士課程
愛葉由依 公務員

李洪章	神戸学院大学現代社会学部
白凜	東京大学大学院博士課程、学振特別研究員 D2、(一社) 在日コリアン美術作品保存協会代表理事
野入直美	琉球大学
甲賀真広	日本学術振興会特別研究員 DC1 (首都大学東京)
佐草智久	立命館大学
久保田英助	愛知学泉大学

(2) 退会

李亜、水谷尚子、Gettings Robert、石村華代、澁谷智子

* 連絡先(住所・電話番号・E-mail アドレス)を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

(事務局長 人見佐知子)

6. 2018 年度 (2018 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日) 会費納入のお願い

平素は、学会運営へのご協力をありがとうございます。

本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願ひいたします。

会費は 8 月末日までのご納入していただきたい旨、お願ひしておりましたが、まだ未納の会員さまがいらっしゃいます。学会誌は一斉発送の時期を過ぎておりますので、ご納入確認がとれた後に、個別にお送りさせていただきます。

また、一部ですが 2017 年度分、2016 年度分についても未納の会員さまがいらっしゃいます。こちらでも早めのご納入をよろしくお願ひいたします。

■年会費

一般会員：5000 円 学生・その他会員：3000 円

* 「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以内の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

* 年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

* 払込取扱票(ゆうちょ銀行の青色の振込用紙)の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

* 従来の記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキュウ店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：(受取人名)：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて、個別に領収書も発行させていただいておりますので、その際にご連絡下さい。その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の上田（uedanota (at) kindai.ac.jp）までお問い合わせください。

.....

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニューズレター第35号

2019年2月12日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒577-0813 大阪府東大阪市新上小阪228-5

近畿大学Eキャンパス文芸学部 人見佐知子研究室内

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

*郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。
